

ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション学科

教授 三科 貴博

1. 教育の責任

- 1-1. 主に 2,3 学年の専門必修科目を担っている。(後記一覧表参照) 理学療法学コースの履修規定では専門必修科目の落第は後期に設定されている各学年に配当されている(2 年生: 検査測定実習, 地域理学療法学実習 3 年生: 評価実習) の臨床実習は履修することができない。(健康科学大学 2023 年度版「学生便覧」P115~P116 参照) その前提条件となる科目を担当することは、臨床実習を履修するにふさわしい知識・技術・人間性を兼ね備えた学生を養成せねばならず、知識の教授には最大限の努力と効率性が求められると共に、成績判定には関門となるに相応しく妥当性が求められる。
- 1-2. 担当する科目は高齢者と介護保険関連分野であり病院勤務を職業フィールドとしてイメージしている多くの学生には関心が薄い分野である。しかし、厚生労働省が 2025 年実稼働予定の「地域包括ケアシステム」に対する理学療法士の参画を期待するならば、一人でも多く当該システムの理解と誕生のプロセス及びシステム内での理学療法士の活躍の場(活動の立ち位置)を考察できる学生を養成しなくてはならない。そもそも「地域理学療法学」が新科目として創設された背景を鑑みるに、退院後の生活期にこそ人生の重点が置かれる退院患者のサポートの重要性を見出せる「気づき」を学生に促していかななくてはならない。
- 1-3. 新カリキュラムで新たに創設された「地域理学療法学実習」では介護保険関連に関する理解と参画が学習目標として掲げられている。全実習の 1/2 は医療関連施設での履修が推奨されている臨床実習において専門的に介護保険分野に関わることができる機会は貴重である。実習施設との協働の中で健康寿命の延伸と生活期の QOL の向上を理学療法士の視点でとらえることがどの程度できるか、社会保障医費を削減する社会情勢の中において学修する意義は大変重い。

2021 年度

科目名	時期		受講者
小児理学療法学	前期	3 回必修	2 年生 92 名
理学療法マネジメント	前期	8 回必修	2 年生 92 名
基礎演習 I	前期	15 回必修	1 年生 12 名
高齢者理学療法学	後期	8 回必修	2 年生 92 名
地域理学療法学	後期	8 回必修	2 年生 92 名
リハビリテーション特別講義 I	後期	2 回選択	3 学科 1~3 年 93 名
検査・測定実習	後期	45 時間必修	2 年生 92 名
地域理学療法学実習	後期	45 時間必修	2 年生 92 名

2022 年度

科目名	時期		受講者
理学療法管理学	前期	15 回必修	3 年生 92 名
小児理学療法学	前期	3 回必修	2 年生 61 名
予防理学療法学	前期	5 回必修	2 年生 61 名
理学療法マネジメント	前期	8 回必修	旧カリ 2 年生 5 名
基礎演習 I	前期	15 回必修	1 年生 12 名
高齢者理学療法学	後期	8 回必修	旧カリ 2 年生 5 名
地域理学療法学	後期	15 回必修	2 年生 61 名
リハビリテーション特別講義 II	後期	2 回選択	3 学科 1～3 年 93 名
検査・測定実習	後期	45 時間必修	2 年生 61 名
地域理学療法学実習	後期	45 時間必修	2 年生 61 名

1-4 授業外活動

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。(2022 年度についてののみ)

- 1) 学生・就職・卒後教育委員会 委員長
- 2) 国家試験対策委員会 委員長

1) について,新型コロナウイルスの感染拡大により 2020 年度より開催中止していた学園祭を 3 年ぶりに開催することができた。一重に伝統が失われていくことの危機感と共に,学生の連帯感の欠如がより深刻になっていくことにより社会人として必要と思われる自分と意見の違う他者との調整力や自分で何かを成し遂げたという成功体験を学修する機会が失われてしまうことを危惧した。

既に 3 年の月日が流れ,学園祭の中心メンバー（本学では当時の 3 年生）は既に卒業していることから組織づくりを基礎から始めなくてはならなかった。他者とのかかわりが薄れ,そもそも対面でのコミュニケーション自体が稀な環境において,企画し運営し結果を出すことの素晴らしさを粘り強く説得した。そもそも意欲的な学生が集結していたので,計画を練り企画することのプロセスを解かりやすく説明することで学生たちは頭の中で企画をまとめるシミュレーションを何回も実施し,実際にそれを準備の段階で現実を実施することができた。また,当日の運営も感染予防と並行して行うなど困難を極めたが一人の感染者を出すこともなく、200 名近くの参加者を集める結果も出すことができた。

学生の大学行事という限定された催しではあるが,①学生自身が本学の歴史を理解し本学の教育方針に沿った内容で学園祭を企画できたこと。②コロナ禍で失われつつあった対面でのコミュニケーション能力を最大限に発揮し,他者の主張を理解したこと。③自己とは相容れない他者の主張との狭間でストレスの耐性とそのコーピング能力を高めることができたこと。④集団をまとめ目標に向かって動かす統率力,協調性を体感できたこと。

⑤大幅な予想を超える参加者が集まったこと、また学生なりの感染予防対策で一人の感染者も出さずに終了することができ講義・実習では得られない成功体験を経験できたこと。以上のことが少なくとも 3 年ぶりの学園祭準備・開催においてそれに携わった学生が学修できたであろう内容である。

2. 教育の理念・目的

本学の建学の精神は「豊かな人間力」「専門的な知識・技術力」「開かれた共創力」の 3 つの力を兼ね備えた人材育成として以下のディプロマポリシーを掲げている。

- (1) 生命に対する深い理解力、人権を尊重する高い倫理性、他者を思いやる豊かな人間性を身につけている。
 - (2) 専門的な知識・技術力とそれを活かすための幅広い教養を身につけている。
 - (3) QOL (Quality of Life) の重要性と多様性を理解し、全人的な視点から支援することができる。
 - (4) 関連職種と協働しチームの一員として役割を果たすためのコミュニケーション能力を身につけている。
 - (5) 様々な課題に対応できる社会人としての基礎力を身につけている。
 - (6) 社会の変化や技術の進展に対応でき、自己研鑽する力を身につけている。
- (健康科学大学 2023 年度版「学生便覧」P5 参照)

2-1. 私自身の教育の理念：自利利他の精神

本学ディプロマポリシーの冒頭にもあるように医療職の養成として、いかに相手の立場に立って物事を考えることができる人材を育成するかが重要である。自我の確立が命題である年代において自我同一性の確立と並行して他者を思いやる行動を習慣化することは自己の確立に余念がない学生においてはその分困難を伴う行動変容である。しかし、この点について思い至らぬまま利己的な行動に終始してしまうようでは就職できたとしても患者から信頼されることはなく、チーム医療においても軋轢を生んでしまう事は明らかである。他者を思い尊重し、他者のために働くことでやがてそのことが自分に良い形で戻ってくることを疑念なく思い至ることができる人材を育成したいと考えている。

2-2. 俯瞰的視点での思考

本学ディプロマポリシーにて掲げている「幅広い教養」、「全人的視点」、「社会人としての基礎力」いずれのキーワードも狭小な視点では叶うはずもなく、いかに多角的な観点で物事を観察・把握・分析できるかその能力が必要となる。今般情報過多ともいえるインターネットが発達した社会の中で SNS 等を中心に氾濫する玉石混交の情報の中から真に有益な情報を選択できることが第一歩となるであろう。信じたいものだけを信じる人間の特性をふまえ、あまたの情報の中から真質を見極め取捨選択できるために

は、情報の海に埋もれるのではなく（平面で情報を捉えるのではなく）、俯瞰的な立場（いわゆる立体的な観点で）で情報を整理する習慣をつけてもらいたい。まずは与えられた情報（講義内容も含めて）を疑い、エビデンスが保証されているかを確認し、帰納的に信じられるであろう情報を蓄積していく学修を進めていく。情報社会においてリテラシーは当然のこととしてその収集力、発信力、俯瞰的思考で情報を選択できる能力は現代社会を生きていくためだけでなくエビデンスに基づく治療手技の選択、適切なりハビリテーションに関する患者・家族へ適切な情報提供など意義が大きいと考える。

3. 教育の方法

前提として担当科目における各回の学修目標を設定する（各講義シラバスを参照）。その際には必ずそのカテゴリで国家試験に出題された内容を含めるよう留意する。必ず講義開始時に学修目標に関連する国家試験過去問題を1～2題提示する。冒頭5分はこの時間に充て最後の10分間はまとめとして冒頭出題した国家試験問題を再度提示し、その正答率をもって形成的評価とする（ブルームの3つの教育的評価参照）。

現状学生の基本的気質としてTP（タイムパフォーマンス）には留意し、短時間で効率よく押さえて欲しい学修項目の理解を促す。一例としてシラバスで掲げた1回分の学修目標をさらに細分化し（5～6項目）、1項目10～12分程度で要点をまとめなぜ必要な知識なのかその他の項目相互の関係から理解を促す（できれば知的好奇心を促す発問を加える）。このサイクルを5～6回反復し飽きさせることなくボトムアップした上でまとめの形成的評価を行い、成功体験を促していく。

基本的に初等・中等教育で実践されている学習指導過程を参考に学習指導案を策定し実践する。学生の学修活動、発問とそれに対する反応をあらかじめ予想し講義全体のタイムスケジュール（講義進行のシナリオ）を策定し講義内容と形成的評価がズレないようあらかじめ確認した上で実践する。

4. 教育の成果・評価

担当科目の一例を挙げると理学療法管理学（3年生、前期、15回、必修）では授業評価として4.3（全体平均4.3、2022年度授業評価アンケート参照）のスコアが結果として出ている。新設科目であり新カリキュラムに適合して講義内容を構成するには腐心したが上記「教育の方法」の実践と講義目標を精練したことによりオンラインではありながら新設ながらも平均的評価がなされたものと考えている。一方同じく新設科目予防理学療法学では4.1（全体平均4.3、2022年度授業評価アンケート参照）であった。同じく講義目標等精練したにもかかわらず平均を下回った原因としては、①一部オムニバス形式を採用したことにより全体的に統一した「予防事業に関する理学療法士の関わり」というテーマが学生に捉えにくかった。②管理学では就職後の職場でのチーム医療や人間関係などイメージしやすい内容構成であったが、予防では対象者とのそもそもの関わりが医

療場面からイメージしにくかった。③予防というキーワード自体が回復過程を学修してきている学生にとって関心が薄くなじみのないものだった。以上のことが原因として考えられる。当然ながら予防に関する学修の動機付け自体は評価結果から成されていると判断できるが、より以上の興味・関心を引き出せなかったことはこちら側の責任として受け止めなくてはならない。

また、授業評価の中ではオンライン形式ならではの難しさも散見される。特に講義の進行において学生の反応を確認しながらの推移は困難で、対面形式のように表情が確認できればある程度のフィードバック（理解しているかいないのかの）を得ながら不安な場合はすぐにリポートすることも可能ではあるが一方向にならざるおえない場面が出てきてしまう。アクティブラーニングを取り入れながら各自考察をまとめる場面においても対面形式ではペンの動きで進行度合いを推し量ることができるが、オンラインでは時間で区切るしかなく（手を挙げる機能でだいたいの進行具合は確認できるが）課題をまとめる間合いの難しさを感じている。

改善点としては予防理学療法学では平均を下回っていることや学生自身の感想などおから、いかに講義目標について興味・関心を持ってもらうか教材の開発・導入に傾注する必要があると感じている。学習指導案の中では教材の見せ方にも工夫を凝らす必要があると言われており、本学の学生においてはいかに初見でヴィジュアルに訴えかけることができるかが肝要でありそのための教材の準備が必要であると考えている。

5. 今後の目標

短期目標：自己学習の習慣化とアクティブラーニングの完全実施

講義目標の達成に現在一部アクティブラーニングを導入しているがまだ完全実施には至っていない。到達目標を提示し、それを達成するための学修過程自体を学生自身が設定できることが理想ではあるが、それは教授行為をネグレクトしているのではないかと危惧も感じている。学生自身の能動学修が成立するためには緻密なプログラムが必要であり、その準備のためには膨大な回数のシミュレーションが検討されなくてはならない。少しずつではあるが現在の講義内容を改定しつつアクティブラーニングの完全実施を目指していく。

長期目標：国家試験的知識と臨床現場での知識を効率的に教授できる指導方法の確立

座学で履修する国家試験に合格するために必要な知識は必ずしも医療・介護保険現場で必要な知識（イコール）とは限らない。関節可動域検査において検査手技の基本は学修するものの、関節可動域制限や痛みがある場合の計測については最大限客観性を担保しつつ都度教科書には記載されていない計測方法を実習施設毎に運用することがある。バリエーションは限られているもののイレギュラーな測定方法のすべてを教授するこ

とは既定の時間内では難しく学生にとっては余計なものになってしまうケースが多い。

実習方法も新カリキュラムから CCS（クリニカルクラークシップ）が主流となり、技術面では学生自身の意欲的な学修能力が強く求められている。この点、まず基本に忠実に測定を行えることが肝要（国家試験合格レベル）となるが本学のブランド力向上のためには医療・介護保険分野での卒業生の評判を高める必要があり、一つの方策としていかに現場で必要な技術を使える知識として学修しておくかということにも腐心しなくてはならないと考えている。